

N R A の 基 點

かゝ 終 點 迄

五三三ハ

五三五、六一、七〇

詩 作 五

林 田 成 雄

984 S. Kingsley Dr.
L. A. Cal. U.S.A.

(5) 雲の影に

倭は糸の上を這へ廻つてゐる

倭の背には印が、糸へ、キヤフキヤフと音してゐる。
（糸）はまた糸の如きもの

音の揺れ、しゝる、糸の如きもの、糸の如きもの。

糸の上を這へ廻つてゐる、糸の上を這へ廻つてゐる。

糸の上を這へ廻つてゐる、糸の上を這へ廻つてゐる。

倭は糸の上を這へ廻つてゐる、糸の上を這へ廻つてゐる。

倭乙人な時同く糸の上を這へ廻つてゐる、糸の上を這へ廻つてゐる。

倭は糸の上を這へ廻つてゐる、糸の上を這へ廻つてゐる。

成る程、幼少の頃を塔に上り、おあふ、能に、
の幼少の頃の頃は破れぬ。

無心の幼少の頃、新し〜と、
スソフにも買ひ得た父も、矢張り、
是れ！ 新の靈心、熟つても、
成る程、破れぬ。スソフにも、
成る程、新の生活は破れぬ。

知得、新の生活は破れぬ。新の
心は破れぬ。新の心は破れぬ。
破れたスソフにも、新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。

新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。

新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。

新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。

新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。
新の心は破れぬ。新の心は破れぬ。

牧物牧

黄金は權威ありて不足なりや。

（由良の迷）
人三三
元徳

輕業師が一本の綱を瘦り歩き

る性分田畑に牧獲れを護る

女々女々しく交遊し傷る

歩みでよい。それうゝ人がその足を踏み外へ

たうとうか。

紙幣に煽く人。世に凶性常住の貌はあらずか。

糸は答へよ。

權威とは何か。

糸は、毎日くの勞働生活にけんたうを感じしめる

てあらうより。その片断の補填から道水たき

一歩でよい。糸は、その肉体的せうけんから道を踏み外さぬ

肉体的せうけんから足を踏み外さぬ。そなく思ふ。

糸が腹は集りてある。

煙け通集りてある。

糸がわらうものは心の象であるか。

否、佛心は断りてある。

糸もあらう、なやめもあらう。現實に生きる糸である。

林田盛雄創作用紙

祈はあし音をしの^{はし}、細めに罪を悔し挑
 ける。寤るはまゝ、黑暗の。かすかに寤息の
 呼んで、^中目^の賣めた探るの。方々。いそが
 には、^聲矢^は休^は、静かに、静かに、寤るに身を寄
 せる。^{さう}に。獨り。祈は安心する。
 祈の聲は、わがは、^{高き}上^はは、^大
 のまゝになつて、天国の夢を造んでゐる人々
 である。幼女を認見する人々。
 祈はつくつく、それを知る。
 祈は、^心方^はかりし日^はあつた。
 祈は、^心から^を讀^み美する。
 祈は、^夢に^現に、人同社會の課金を觀了。
 幼女の課金の美しさ。
 人同社會の課金。認了。
 曾て。今。それから来る。

和は、新の裸から、魂の裸へと、
 細めに用いた舞のうのきのみのな。
 3. 衣の服をあのさのてのさにいる。
 りや、私の身の人の心の留の裸をののさのさ。
 ころ。 裸。
 ともは、魂の裸と、言の裸を保護す。
 する 人の心の裸の相のたのいのな。
 初め 人の心の裸の相のたのいのな。
 大の衣になうた衣のさのなのな。
 行 裸の衣のさのなのな。
 な 人の心の裸の相のたのいのな。

片葉子下

八三二十一

腕をたまぬりてけり男上

若く、健康で、男うーり男上

雪玄加里お前の影がなくなつたり、

お前の男男おくろが、歎くたうう。

誰もていふことは出来なり。

何とていひもりり、腹一杯抱いた。

人通のなう、舗道に夜更けを行来なくして

誰とてはたものけなり

板かろにその夜を明かす山白のやうに

4つけた家か、あ、お前の上宿か

下宿の

お前の着物を誰も剥ぎ奪りばなりだうう

いお前が布巾を、誰とてか、お前が、

お前が、お前の白ねた鏡を、お前の箱、お前の

お前の、お前の、

お前では、お前の、お前の、

誰れも、お前が、お前が、

約束に酔つて

ヨケ、ヨケ、幼子が歩き始めた。

意識が醒め、訓練に薄明になる。教へ

る。手マホ、ヨケ、足板木、告知に候

る人同的な約束を教へる。

お前の自衛のため、養護の前には「

と意志を傳達する人た。たかろ、小のほけ

来に紙片である。

養護の1排出行行に陶酔する。うーん

ーんと言ふも、養護する時は、とたはばある。

約束を傳達す

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

約束、酔つて、白は、切みは、田と文談、

林田盛雄創作用紙

秋風は秋へてゐる

鳩が二匹電線に憩つてゐる

秋風は黙つてゐる

野原は秋へてゐる

鳩は黙つてゐる

道傍に坐つて赤い秋へてゐる

赤い心の道にも赤くして秋へてゐる何か大い

の秋へてゐる

ヤ

或子龜氣

二二三

すめこ
みろ。
ふはハ
ー
うり
片傷で
た万
傷~~を~~
~~に~~
癒れた
心を
鑒や

外
ひ
は
、
へ
の
（即音）
へ
する
。

い

大坂の老田
は
種
の
し
る
こ

餘
風
12
聲
如
九
新
聞
在
24
乙
亥

妻父以爲痛女毒拷乞死

44
 は
 無
 言
 外
 念
 の
 諸
 事
 無
 二
 あり
 3

今朝、
和は夢を
見た。
なを
友人は夢を
見た。

新
く
ー
く
と
増
り
圓
や
幾
雙
も
も

歩
ま
ま
う
〜
ふ
た
が
|

妻
方、
位
キ
本
て
、
糸、
ル
栗
ミ
カ
サ
ハ
ミ
ミ

乙人女三才格下知

病友、自殺、あり

自殺の悲劇
病友を
何と救ふ

世友かゝるの字新編

子
 女
 心
 如
 戰
 懼
 ず
 御
 答
 に

窓のすき
間から一
秒に
一瞬を
軽く
なす

林田盛雄創作用紙

元三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

お前は何の父か

壁の奥母は微塵をゆして、秋の意は整然と

なりんた、小生の腹を、数々を新く、うしー

り、省りて、~~新~~新り、庭の花辨に交わりあふ

山、~~見~~達の声よ。お前は、お前達小兒院の山

見、見の姿を、今人の腹に、~~お~~おまきしめる。

（おまきしめる）

宵の扉に、笑やうれた、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

廊下、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

其の、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

父なき兒、母なき兒、その父あり、その母あり、

り、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

船、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

お前達、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

暗い、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

お前、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

お前、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

お前、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

お前、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、~~お~~おまきしめる、

（おまきしめる）

（おまきしめる）

一三九五

軍事と錢と

徴兵の徴け、軍事に

調うかに明け暮る、野の生活に

ここに一新、あすこに一新

白壁の輝き、牛の鳴り、キトリの、小水

ニトリの胸を暖めて歩き回す

この秋の収穫期の、展望を調うかと、揺るも、

お前は、夏の人生を知らないの

野原の、草中、^{おは}錢が、なや、は育た、大なるた。

（心は）

人よ、えう、ホケウツトに、
今更う、夕金代が、大受

何々、~~何々~~、^{はいつて}、^{お前は}、^{の、親野に}

徴兵の徴け、^{野原の、おまゐもと}、^{田舎を、展望す}

あゝ、軍事は、かゝ、廻るた。
の、心、水は、回れやと

あゝ、下、~~何~~、^{い、つ、人}、^{の、心}、^{の、水}、^{は、回れやと}

徴兵の徴け、^{い、つ、人}、^{の、心}、^{の、水}、^{は、回れやと}

吾、きた、心、の、水、を、誰、が、や、り、も、こ、え、る。
街、には、^{徴兵}、^{の、徴け}、^{の、水}、^{の、道}、^{の、あ、る}、^{人、生、の、野、に}、^{水、を、く、も、こ、り、あ、い}
童、の、野、に、^{徴兵}、^{の、徴け}、^{の、水}、^{の、道}、^{の、あ、る}、^{人、生、の、野、に}、^{水、を、く、も、こ、り、あ、い}
子、が、あ、る、^{徴兵}、^{の、徴け}、^{の、水}、^{の、道}、^{の、あ、る}、^{人、生、の、野、に}、^{水、を、く、も、こ、り、あ、い}

他 糖 包 子 港

五三四
一六

見知
之
人
見知
之
人

新舗道にゆがれあり

夏の日は今日の人生と

柳花盡
酒殘

寶石店 高公 寔

キヤスリノ臭

を
導
か
し
た
結

其他種子

終日、倦り神昏也。溺死せしやうとす。務めし

儂は人生の為に命を捧げるか

乙
化
子
乙
子
一
一

信
日
達
ア
AS
信

あ、
雲
~~山~~
山
又
~~山~~
山
山
山

彼方
山
か
一
さ
く
に
樓
お
乙
子

樓東乙子
ふたしは晴る

雑草

ち

ん

ハナ

庭わは日あたりよくおも肥えみうか

僕が手入をなまけた所あり

カリコールが、アスターが、

夜毎 夜毎に雑草が

スロヤが性のやを盛れ

じも僕は隣りの花園をいく

親もな 金もな 針もな

何事もな

心うさすでかきおた

うそをうけ

雑草が第一伸びた

不健康な早春

五三四二

（無知なる母）

大道に居りた春の意下で、お前はまだ採り
拳を収はぶつてゐる。
父は十二時同傷り来た。瞳がたまたま解に開いた。
夜の十時、街の心知れぬ方々とみ
え。百働きのキャス。臭が、何處かの庭花
、香氣を誘ひ、一しまるんで。
一日は二十四時同、等しく長うたうか
と、解は、不規則な生命を創り始め、眼を
、生活は無条件におしつけられた。嬰兒の母
、鈍感さ、愚劣さ、作う新脳神経意弱になつた。
春は花、夏は緑、秋は紅葉、冬は雪
常識と自然と、生活を模倣し、道義倒れ、
お前は、明日も、十時頃、キャウキャウ
と笑つて、明日も書をこくし、睡んだらう。
神様、お前を健康で生きた、か、魂の生活を

不健康な早春と前、母は
お前を育つた。お前、母は
お前、母を父とは、別々な魂の持主なんだ。

収 加 己

百姓の子

「昔の親を恨む人よ、
縁起のカタを恨む人よ。」

セツリツツマノ御カリ喰い子小女あり。

水石きに生し、父田を耕し、
十人の子を養ふ。

シタス、子あり、
山に棲子あり。

シタスのあか、
お路を耕す。

妖術あり

女にリはやすし

シタスほやすし

あけぬ

さあど、
百姓の子

別れも、
お路を

シタスのうぬに、
お路を

入道。三。三〇

三ヶ月の初月

花

五仙の詩。

玩日
玩日
玩日

一丁の結は、酒店あり。草をあり。山の鳥を

夜を、銀行。その他、等々等。

るの途。千の、萬の萬金の喧嘩する

たり。然り。獨り歩くはだし。山腰あり。

腰に上りし箱は、靴の如き。

小紅を腰にぶら下げて、五仙をたぬ山を

あり。靴の如きの山あり。

靴の如きの山あり。

五三二、三三。

雪うさこかーもさう、雪うさこさう

美峰の山、山あり。

うさこさの山、山あり。

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

27
 4
 1
 !
 2
 4
 6
 8
 10
 12
 14
 16
 18
 20
 22
 24
 26
 28
 30
 32
 34
 36
 38
 40
 42
 44
 46
 48
 50
 52
 54
 56
 58
 60
 62
 64
 66
 68
 70
 72
 74
 76
 78
 80
 82
 84
 86
 88
 90
 92
 94
 96
 98
 100

寝
 僕
 野
 菜
 菜
 の
 煮
 貝
 小
 破
 い
 や
 に
 下
 つ
 た

僥
 は
 今
 日
 の
 晴
 ら
 しい
 空
 下
 で
 遊
 び
 たい
 だ
 ね

ウ
ヤ
、
ヰ
カ
、
人
生
の
学
に
、
と
い
あ
た
ろ
う
。

い
や、
誰
か、
新生
の
ため
に、
子
を
う
む
に。
ア
ー
ッ

9
16
2
12
1
2
4
3
12
3
7
0

一五三

言の言はるに
言ふこと。
言ふこと。
言ふこと。

の土平
いけと、
きつし
と。

つ
うみとしぬ
よ

理想を
人生を
毎

廿
 一
 五
 七

僅は
傷く
！
今日の生命の
銭のためだ。

た
た
銭
今
飲
し
本
た

2 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

泣き叫ぶ嬰子の顔を覗いてみると煙子
 俺の心の叫びをきいてくれたものを
 叫ぶ声は晴れたう
 心の乱れは朝うかになう
 それ加へはかなり幸福のかけであうとも
 物 ~~夜~~ 夜の叫び。

夜道の路を
 深くと更ける夜
 夜道の路が 歸る心にも 脚が滑るも
 濡れた靴がやがて といふやうもなり
 破つかれて 何の4
 裏の音を立て

また、斜は明刺、心構へはホトする
 それを人は眼夜の眠りと謂ふ
 夢はかなぬも、夜の眠りよ。
 眠りは知るか 假天のうつつある。

夕日の回想

二三三三三

玄關に小犬の夢があらた

夢の夢があらた

父も、母も、友もなく育つ小犬の驕人であ

つはぎの芽を喰ふ夢があらた

貧乏になれた男が攫人ひるた

夢の夢があらた

夢の夢があらた

夢の夢があらた

細田を見つめた男の心は裏をかくれん

今も今、病で二重の舌がすく

おなかのやい、か、星をワシ預けた

僕の復興計画

ちやそりあと9に43今朝の風だ。

かうまうたりにはほろた。掌の

掌の帛を被つたりさしのつた。

小犬の頭上で行刑するのほ女のさるまたた

糸僕は貧乏になれた。

僕は病みになれた。

僕は女になれた。

僕の心臓は鼓動が弱くは弱く

おて

僕の腹にAさう定めやう。

小犬のミルク、朝、晝、夜の食事

僕の下のうしろは前月の給料

七十八仙が着てゐる。

努力家、

己サ帳

吾は後言致を耳に言こ、

自身、己薩の故勢を固りたこと、又、己

二本のツヤを重を過し、しりりとと重く

全身、血、流れた

神功を、科、業を、建、業を、

微、多、を、

吾は何を感じずる

世に、吾は、皆、得、する、か、ろ、

心、蔵、の、故、勢、を、固、り、た、事、を、

感じ、ず、る、時、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

世、に、一、瞬、の、狂、り、を、

あうかなと言葉を^{無上}と謂ふ

林田盛雄

以上は

一九三三七一ニ

て未^一歩も傍けなり

過勞に^一つ了るゆゑをくやし^一か^一る曰ふ儘く

17しつゝを買ふには一仙迄なり

解とハニを數へるこゝろあり

それ

て未^一も人^一は謂ふ。

人^一とて、社會だ、經驗だ。

覺^一燈に花が夜あ^一の^一靜を^一無心^一に^一眺め^一るこゝ

がある。

無

よ。

一人は謂ふ。屋に生さるもの^一性^一と。

毛布をかゝつて的なく歩くトラップを^一觀^一る。

右の^一左^一へ一瞬にして^一變^一じ^一た^一る自動車を^一が^一あ^一る。

て未^一をもし、

無智は^一無^一に^一あ^一る。

無^一智^一の^一い^一き^一か、

境^一人^一生^一は^一情^一の^一中^一と

「無智に生きた^一無^一智^一の^一い^一き^一か、^一境^一人^一生^一は^一情^一の^一中^一と^一」
了ものよ。一々

老人の沈黙

九三三九一五

林田盛雄

若リ婦 女が その口を食う物をも買ひに来た

女は ハヤヤと振たつた。

梨屋のふくらみも物をも大坂も買ひつた。
にはつまり 船がふくらみ。描きおされた。
船は いくつとくも 女を 眺めたものた。

女は ハヤヤと振たつた。 女は 眺めたものた。

女は ハヤヤと振たつた。 女は 眺めたものた。

女は ハヤヤと振たつた。 女は 眺めたものた。

女は ハヤヤと振たつた。 女は 眺めたものた。

女は ハヤヤと振たつた。 女は 眺めたものた。

忘却の裡で

林田盛雄

私は脳おいて歡樂を求めてゐた。

芯からさう憶ふ一瞬を得たであらうか

今はなにもかも忘れやうとしてゐる

私は烈しい努力に身を苛まれた

芯からこれ悲しき境にたゞあらうか

今はその一瞬さうも忘れやうとしてゐる。

私は憶ふことを体験したと想ふてゐる。

併し、今は一瞬の感懐をかなぐり棄て、

新しう一瞬から、さて人生はこれから

と改くことがある。

さういふ勵みの言葉さへも

よほち三十にして忘れうてと希ふ日か来

た。

朝うかた人生は、夙に追憶の社會から

俗心を脱退させたことだ。

私はとりとめのない人生の感懐を

一時の人生

一九三三.五.十五

数寄

井田盛雄

新は物かどし、~~船~~を止めゝる。

甚かろさう遠あ一船を持つたひあるう。

今は何もかも忘れしめた。

私は私——う驚傷に身を苛んだ。

甚かろさうを越し4をわすれた。たひあるう。

今はそり一瞬さへも忘れたうた。

(ことだ)

私は何やら味をこし、~~中~~にたやうた。

今は何やら一瞬をかたひろき、

一瞬を忘れ、一瞬を忘れ、~~中~~にたやうた。

その人生はてあかろた。~~中~~にたやうた。

その言ふ、~~中~~にたやうた。

今は何やら一瞬をかたひろき、

今は何やら一瞬をかたひろき、

今は何やら一瞬をかたひろき、

人生の土、~~中~~にたやうた。
何れかあかろた。

五三三 五十五

林田盛雄

壁には一枚の額が掛つてゐる

何するたけへ額を

室には妻がゐる

邸には母がゐる

郷にはわが家がある

道中には月がある

何するたけへ我が人生を

何の心にもなほ産屋なうた。

道の表路をたぐへるいざな行く

何するたけへ我が心を

何の聲に暗さを聞かせる

一　　やめぬ人にくる暗さを切斷するたけに

詩

その生活の裡で

人海の中

私の足にはいつの頃かかマメが出来た

終日ユリリト上り下り傷の痛む中になくぬぐう

家に歸ると私は靴下にも脱ぎ捨て、了子

赤いスリッパを片足

黒い鼻緒の片足

私はこんな風に着てくさくなつて了た。

「はち」のスリッパで裁つて、よい」妻が

驚愕する。

私は妻品で床を歩き廻り乍ら、心は女

おいとある

「来月はお産よう

「ハハハ」の笑いには

「ハハハ」の笑いには

今更が臺所の片運ふ、今に何と云やとあかど

